令和 6 年 3 月 28 日

軽井沢町議会
議長 遠山　隆雄 様

兵庫県豊岡市 視察報告書

軽井沢町議会議員　小山　裕嗣

日程：
令和 5 年 10 月 16 日（月）～17 日（火）

内容：
豊岡市教育委員会レクチャー10 月 16 日
学校教育課 教育研修センター所長：服部 隆氏
学校教育課 教育研修センター指導主事：柳原守氏

豊岡市立豊岡小学校 授業視察 2023 年 10 月 17 日

（服部所長・柳原指導主事によるレク）
現在、実施している演劇教育は、特別授業として入れている。
また各教科の中で活かす工夫も取り入れている（意識化して主導して入れていく・各教科だったらどんな視点になるか）年 3 回実施、合計 7 時間

教員研修会は平田オリザさんや田野さんが実施している。
回数は、年 9 回（5 回/4 回　指導案もファシリテーターが作成）
（モデル、事後研修・毎年モデル校は入れ替える）
授業の実践は、基本 2 時間＋振り返り 40 分

【コミュニケーション教育事業】
担任が実施：小 6 と中 1 は、中 1 ギャップを解消するため。行政が力を入れて積み上げてきた成果が見えてきた。
【非認知能力向上事業対策事業】
ファシリテーターが実施：小 1、小 2（4 年間 効果測定）
●ファシリテーターが担当する
●振り返りする・フィードバックの時間をもつ

◆非認知能力向上対策事業
（数値化出来ない能力）
第４次 とよおか教育プラン（5 年ごとに更新）貧困家庭対策の一環としてスタートした（非認知能力が高い子は、学びの意識も高い）

◆演劇ワークショップはファシリテーターによる授業
作成：わたなべなおこ（PAVLIC）さんが起こんなっている。
ワーキンググループと校長会が主体となって、ボトムアップで、教育委員会が吸い上げた。
2 年間の道のりで、校長会と行政が一体となれたから作っていけた背景がある。

演劇ワークショップ
→教員と保護者にアンケートを取っている。
→コミュニケーション教育に関しては理解が進んでいる
→本授業は、保護者の理解を進めるため、授業参観を OK としている

① 現在、関わっているファシリテーターは何名いるか？契約形態及びまたその単価は？
のべ 10 名近く（青年団と連携）、アシスタント 3 名に固定して、メインファシリテーターを育成する。合計 4 人で授業をまわしている。
1 年生 24 回～×年 3 回
2 年生が来年度から入る

② ファシリテーターの契約はどのように実施しているか？
一般社団法人江原河畔劇場に対して業務委託契約している

③ 演劇ワークショップとコミュニケーション教育は同様のものか？
全く別の予算事業となっているが、本質は同じ

④ コミュニケーション教育推進費と、非認知能力向上対策費の違いは？
別枠で予算立てている

⑤ プロ講師による実践は、小学 1～2 年生のみ、教員による実践は小学 6 年、中学 1 年とうかがったが、今後の展開、予算の拡大はあるのか？
小学校 3 年生まで全校実施したいと考えている可能性として、希望性で実施を検討中。
全市展開（全市の小学校に公平にやるべきだと、教育長は考えている）

⑥　今後市内のファシリテーターを、芸術文化観光専門職大学修了生が担っていくという構想はあるのか？
大学 3～4 年生は、県立高校の方へ。一部志望者がいる。

⑦　学校教員とファシリテーターの定期的に情報を共有し合う連携の体制は整っているか？
毎回の授業の後、担任教員と振り返りは必ずやっていく。ここは譲れないポイントだと思っている。

⑧　首長が交代後、コミュニケーション教育に関しての方向性はどうなったのか？また予算面等で変化は起こったのか？
変わらず推進していく機運に変わりはない。青学によるエビデンスが立証している

【その他】
今後の財源問題は、どうしていくか大きな課題となっている。県が牽引している長野県は理想。ロート製薬との包括連携協定（多角的に展開するために）を行い、コミュニケーション教育のエビデンスを、豊岡市と青山学院大学の三者協働で実施中。来年初旬には公開予定。

非認知能力を定量化することが必要（教育長の至上命題）

考察：
長野県が推進している「アートの手法を活用した学び推進事業」は、実施校も年間 10 校程度で単発の機会であるため、豊岡市のように市町村独自単体の予算化が継続的な実践のためには必要不可欠であると今回の視察を通して感じた。先ずはモデル校での実施等、教員との連携も踏まえて丁寧な実践、アプローチを心掛ける必要性、また後進のファシリテーター育成も同時進行で行っていることが垣間見れた。

持続可能な取り組みにしていくためには、教員たちがコミュニケーション教育を体験し、共感を得た上で丁寧に進めていくべきであろう。同時に学校現場でどのような実践がなされ、教員が日々研鑽を積まれているか、その実態をファシリテーター自身が的確に掴むことが重要であると感じた。その為には教員との対話が肝要で、大切なのは一つ一つの実践を丁寧に、誠実に取り組む姿勢はもちろんのこと、共に機運を醸成するファシリテーターと教員との連携無くして、継続的な実践は成立しないだろう。また海外の先進的事例等もどん欲に情報収集し、研鑽を積み重ねていかねば「井の中の蛙大海を知らず」となる。次世代教育の一つの手法として、コミュニケーション教育の可能性を沢山の方々に知っていただく機会が増えるように、今後も軽井沢町の実践を幅広く共有していきたい。　　以上